慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西洋史研究第一輯(東北帝國大學西洋史研究會編輯)
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.171(499)- 172(500)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖フランシスコ・シャヴエル小傳

（吉田小五郎著　大岡山書店發行）

十六世紀の基督教史を飾るルーテルやツウイングリやカルヴイン等の功績は何れも偉大であり、その思想と思想の力强き把持とに於て、彼等は優に人類の雪線を拔く高峰である。けれども彼等に對立して、更に嶄然と頭角を擢ずる者は聖フランシスコ・シャヴエルであらう。その熱烈なる信仰と忍苦の生活と獻身的なる傳道とには、正に新教の哲學以上のものがあると言ひ得るであらう。我が日本の基督教史が、斯かる偉聖の渡來によつて展開されたのは、眞に奇しき因緣とすべきである。かゝる偉大なる人物にして、然かも日本の文化と直接深い關係を有する聖人に對して、邦人の關心が餘りに少ない爲であらうか、それとも研究が甚だ困難な爲であらうか、從來シャヴエル傳に關する日本の文獻は甚だ稀少である。然るに最近同窓の先輩吉田氏によつて、シャヴエル傳の公にされたのは、寔に慶すべきことである。本書は聖人の出生より、其の後の生國と一家の運命を述べ、パリ遊學時代に於けるフアーベルやロヨラとの交より、耶蘇會創立に至るまでの事情を說き、進んで東洋布教を志して遂に日本に渡來し、更に支那の扉を開かんとして上川の島に病んで昇天するまでの、幾多の事件や場面が美しい文章を以て寫されてゐる。波瀾曲折に富めるシャヴエルの生涯を、よく三百頁に滿たざる分量に壓縮し、また章を分つことと三十九の多きを數へ、以て讀者の理解に便ならしめたる、又は聖人に對して敬意を拂ひつゝも、著者は飽くまでも史學者たるの態度を以て敍述せるなど、何れも本書の特色であるが、更に卷末の附錄をも看過することが出來ない。卽ちシャヴエルの書翰一覽や年譜、又は聖人の名に對する各國綴字一覽の如き、何れも著者の綿密なる學究態度の一端を窺ふべきものである。著者は更に正確なる史料に基いて、別にシャヴエル傳を編纂する豫定なりといふ。本書は纔かにその序文程度にしか相當しないものであらう。著者の眞摯な不斷の研究が、貴重な大著として世に現はれる日の、尙ほ遠からずとして大いに期待する次第である。（有賀春雄）

西洋史研究第一輯

（東北帝國大學西洋史研究會編輯）

最近に於ける本邦史學界の進展は西洋史の研究を專門とする雜誌をも生むに至つた。曩に九州帝大より「西洋史研究會記錄」が生れ、今また此處に東北帝大より「西洋史研究」の誕生を見るに至つたことは誠に慶賀に堪へない。

本誌は研究、書評及び紹介の二部に分たれ、最後に一九三一年に於ける我國の西洋史學界展望として昨年度に上梓された西洋史關係の論文著書を六項目に分類し至極便利な一覽表としてゐる。研究欄には大類伸（ブルクハルトの「伊太利ルネサンスの文化」を讀む）、原隨園（Theseus 傳說考）、今村文英（キケロの政治思想、酒井三郎（ギボン「ローマ帝國衰亡史」に關する二三の問題）の諸氏が執筆されてゐる。また書評及び紹介欄には長崎、金倉、松原、

高橋、山口、野村の諸氏がそれ〴〵懇篤なる解說を試みられてゐる。最後の一覽表をも加へて一七四頁、全文横組である。卷頭には中村善太郎氏の力强い言葉がのせられてゐる。

因に本誌の出版は東北帝大に於ける西洋史研究室出身の少壯學者及び學生を中心として試みられたとのこと、その洋々たる前途には期して待つべきものがあらう。次輯は今秋、出版の筈なりと聞く。定價七拾錢。冨山房發賣。(近山金次)

大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第三輯

大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査(其一)

(大阪府發行)

本輯所收のものは大阪府史蹟名勝天然紀念物の總括的な調査の一部として、委員梅原末治氏の從事して居る大阪府下に於ける主要な古墳墓に關する調査の結果の一部であり、其對象となつた遺蹟は、大阪市内から和泉の一部に亙る約十ケ所の墳丘であつて、主として昭和五・六年度の調査に係り、梅原委員と岸本囑託との協同調査の成果である(凡例拔萃)。

今其目次を逐うて各項に就て見るに、序說に於ては古墳墓調査研究の意義を說き、梅原氏が特に大阪府下の古墳墓調査に當るに至つた事情を叙し、次で古墳分布の概觀として調査對象となつた古墳の分布は先史時代の住居址に近い高臺地帶に營まれてゐること、地形の上から注意を惹く大形墳墓の概觀并にそれ等以外の廣範圍に多數に分布して居る事などを注意し、其調査は「奈良縣のそれと共に直ちに本邦古墳墓研究の中核をなすものであつて他府縣の調査などと同一視すべきでなく、同時にまた其の事業の容易ならざるものが存する」とて基本的調査に着手せるにも拘はらず、「主要な古墳墓」と特に斷らねばならぬ程の大事業であると爲し、次に府下の古墳調査の回顧としてウイリアム・ガウランド教授の本邦學術界に遺せる功績より述べ、年代を逐うての回顧記及び梅原氏個人の懷舊的感想が續いて居る。

次で本題に入り大阪市内の主要な遺跡として(一)茶臼山古墳(二)四天王寺の石棺蓋(三)岡山(御勝山)古墳(四)帝塚山古墳の四項が擧げられて居る。(一)は三段築成式前方後圓墳にして、其營造年代は高塚制の前期に屬す可きものとし、難波の荒陵に比定す可く論證が試みられて居る。(二)は茶臼山古墳出土の遺物と疑はるゝもので現在四天王寺の本坊の庭に置かれてゐる。其石質、形狀を說明し、茶臼山古墳との關係に就ては論斷し得ないとされて居る。(三)の岡山古墳は德川秀忠の陣營となつたといふ事からよく知られて居る。前方後圓墳(前方部削失)、長軸約一町内外に達せるものゝ如く之れまた本邦墓制の最盛期に於ける營造とされる。(四)の帝塚山古墳も亦明治三十一年十一月陸軍大演習に際し、明治大帝の御野立所となつた名所である。前方後圓墳、特に前方部には埴輪圓筒列の並存狀態が窺はれて興味を惹いて居る。

次に泉南郡淡輪村の古墳として、淡路島を前に臨む高臺に所在する古墳群の中(一)宇度墓と其の陪塚(二)西陵古墳の概觀調査が含まれて居る。宇度墓は俗にニサンザイと呼ぶ西向の整美な前方後圓